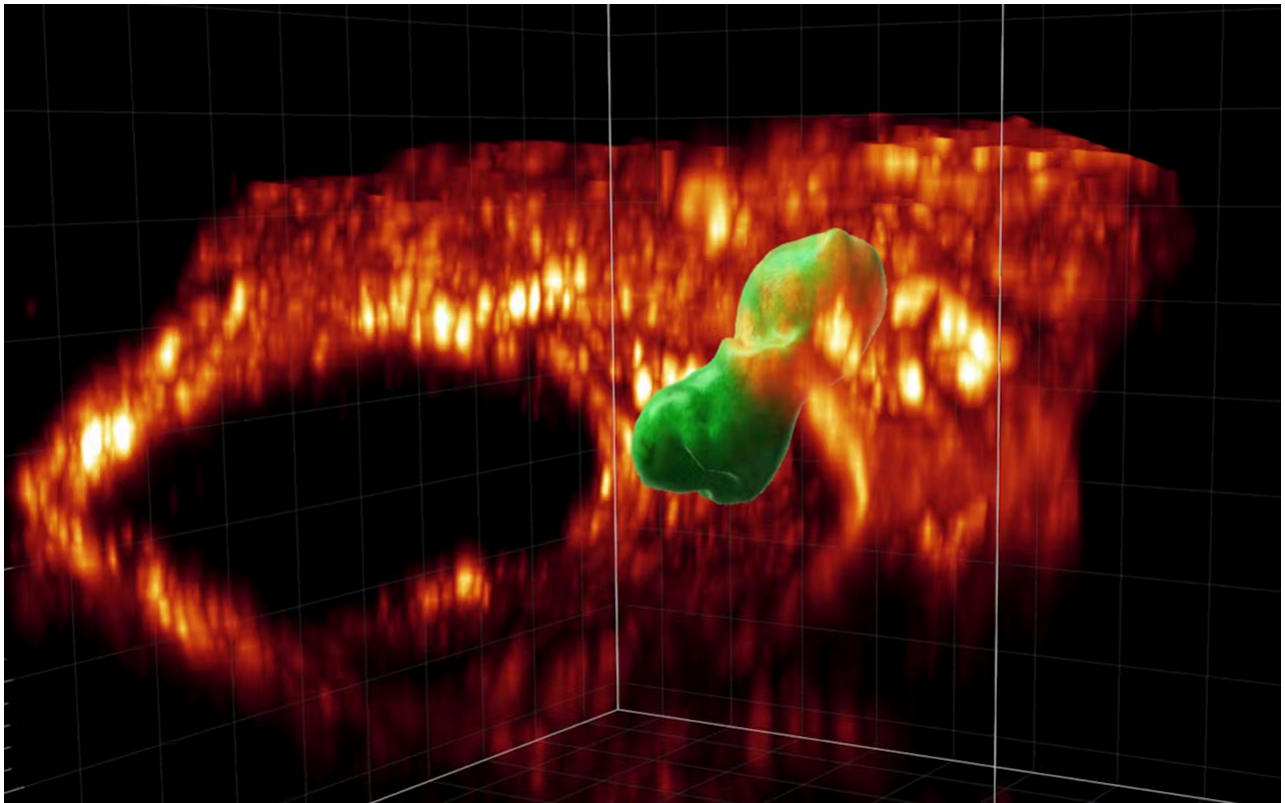


がん細胞が転移する仕組み、生殖細胞の移動と共通 九州大学など解明

2026/4/10 5:00 | 日本経済新聞 電子版



血管を抜ける途中のがん細胞を撮影した写真から作成した3Dイメージ（空洞が血管。血管の壁をがん細胞がブレブを作って抜け出そうとしている）=九州大学提供

九州大学などの研究チームは、がん細胞が血管を通過して体の別の部位に転移する仕組みの一端を明らかにした。鶏の生殖細胞や原始的な生物が使う仕組みで血管外に抜け出していた。

患者の命を脅かす転移に必要な能力をがんが獲得した起源の解明につながる。新たな治療薬の開発に役立つ可能性がある。成果は英学術誌「ネイチャー・コミュニケーションズ」に掲載された。

研究チームは、細胞の様子を生きたまま観察できる鶏の胚（受精卵）を使って研究した。性質を変化させた鶏の生殖細胞やヒトのがん細胞を胚の中の血管に入れて観察した。

その結果、がんの一種の肉腫の細胞は鶏の生殖細胞と同じ仕組みで、転移に必要な「ブレブ」と呼ぶ風船状の細胞突起を作ると分かった。がん細胞の種類によってブレブを作る仕組みが異なることも明らかになった。乳がんや前立腺がんは原始的な生物の細胞性粘菌などと同じ仕組みでブレブを作り、血管から抜け出していた。

がん細胞は本来は動かないが、性質が変わると体内を移動して転移し、臓器を壊すようになる。研究を率いた九州大の斎藤大介教授は「この能力が新たに獲得されたものなのか、もともと生物が持つ仕組みを流用したのかが分かれば、治療の戦略が大きく変わる可能性がある」と話す。

今後はがん細胞がブレブの形成を始める仕組みを詳しく調べ、がんが血管外に抜け出すのを防ぐ新たな治療法の開発につなげる。

【関連記事】

- ・ [がん細胞を自滅させる薬で「大きな前進」、鍵となるたんぱく質を阻害](#)
- ・ [治療と診断に使える放射性医薬品 量研機構、マウスで効果確認](#)
- ・ [胃がん転移、金沢大が仕組みの一端を解明 ヒアルロン酸が関係](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.